#### 神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

#### On Fukuzawa Yukichi's "Getting out of Asia"

| メタデータ | 言語: jpn                                      |
|-------|--|
|       | 出版者:   |
|       | 公開日: 2008-09-30                              |
|       | キーワード (Ja):                                  |
|       | キーワード (En):                                  |
|       | 作成者: 田中, 敏彦                                  |
|       | メールアドレス:                                     |
|       | 所属:  |
| URL   | https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/527 |

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



# 福沢諭吉の『脱亜論』をめぐって

田 中 敏

彦

- (一) はじめに――江華島の草芝鎮にて
- (二) 問題の所在――『脱亜論』と「脱亜入欧
- (三) 問題解決――アジア蔑視とアジア侵略
- (四) おわりに

### (一) はじめに――江華島の草芝鎮にて

韓国本土の間の水路を眺めていた。 二〇〇八年八月二十一日午後一時頃私は韓国の江華島(カンファド)の草芝鎮(チョジジン)要塞跡から、江華島と 思いのほか狭く、 水路の幅は二百メートルほどだが、ちょうど干潮時で水路の半ば

は岩や泥が露出して狭いところでは百メートルほどしか水がない。紛れもなく海の匂いがするのに、薄茶色に濁った水

(1)

路の水はもっとも狭まったあたりで白い波をたてて北から南に流れていることがわかる。この水路が正式には 「塩河江

ソウルの南西を流れて北上する漢江(ハンガン)と北から流れてくる臨津江(イムジンガン)が合流して黄海に注ぐ

### (ヨンハガン)」と呼ばれる所以だ

するには江華島を経由して漢江を遡行する必要があるため首都防衛の要地でもあり、一九世紀後半には九つの砲台が島 その河口を塞ぐように横たわる江華島は、朝鮮各地から運ばれてくる物流の要衝であるとともに、 の周囲に張り巡らされていた。 敵が南から水路に近づくと最初に立ちふさがるのが草芝鎮であり、 そのためにここは多 海からソウルへ侵入

八六六年)、辛未洋擾(一八七一年)および雲揚号事件(一八七五年)の激戦場であり、老松と城壁に残る各種の砲弾 要塞跡の松や城壁には砲弾の痕が残っており、案内板にはこう書いてある。 《砲弾の痕跡 この場所は丙寅洋 擾

くの戦闘の舞台になった

の痕跡が、熾烈であった当時の戦況をもの語っている。》丙寅洋擾は、

朝鮮に潜入して布教していたフランス人神父ら

2

遣フランス艦隊の軍艦七隻が江華島に侵入した事件であり、辛未洋擾は、フランスに続いてアメリカの極東艦隊が武力 九人が処刑されたことをきっかけに、 賠償請求、 関係者の処罰、 及び通商条約締結を要求して、一八六六年十月極東派

防衛することに成功した。当時の清国駐在のアメリカ公使は、 「朝鮮はペリー提督出向前の日本よりも、 いっそう厳鎖

朝鮮軍は劣悪な武器にもかかわらずよく戦い、フランスとアメリカから江華島

で朝鮮に開国を迫った事件であった。

したる国土である」と報告しているそうである。 て間もない隣国の日本であった。すなわち一八七五年九月日本の軍艦雲揚号は航路測量を名目に塩河江に接近して、草 フランスもアメリカも諦めざるを得なかったほど固く閉ざされた門戸を無理矢理こじ開けたのは、 近代化に 乗り出

県有朋は朝鮮遠征軍を編成して下関に待機させていた た。 芝鎮から砲撃を受けると、 けた》というが、これは排外的雰囲気を醸成するためのデマであり、実際には日本政府の計画的な挑発行動の結果であっ 雲揚号の艦長報告によると、 日本政府はこの事件を奇貨として、 その報復として江華島の近くにある永宗島 《水路不案内のため、ボートを降ろし、飲料水を求めて島に接近したところ砲撃を受 六隻の軍艦を派遣して交渉に臨んだ。 (ヨンジョンド) に上陸して役所や民家を焼き払っ 交渉が失敗した場合に備えて、 陸 軍卿 畄

ここで姜在彦は重要な指摘をしている。 《これはいうまでもなく、 アメリカのペリーが日本遠征の時に使っ た 「故 知

本の目的がペリー 不平等条約の締結を迫った故知に倣って、雲揚号事件が引き起こされたということである。そして朝鮮に押しつけられ に倣う」手法そのものであった。つまり、「(一八七五年) 十二月九日米国公使ビンガムは た江華島条約 ·リーがサスケハナ号など四隻の軍艦を率いて江戸湾に入り込み、三浦半島東岸を測量しながら、武力を背景に開国と (「日朝修好条規」一八七六年二月締結) の故知に倣う朝鮮の平和的開国であることを聞いて諒解した。」(『日米文化交渉史』 朝鮮にとって不利な条項を含んでいた。 は 神奈川条約 (「日米和親条約」·一八五四年三月) (寺島宗則) IJ ₩
iii 外務卿より、 すなわ が日本に

3

する方針の先取りでもあっ 現への第一歩ではないか。あるいはまた、 支那を切り随へ、交易にて魯(ロシア)・墨 これはまさしく、 吉田松陰が一八五五年萩の野山獄で書いた兄への手紙において述べている、 たのではないか。 福沢諭吉が一八八五年三月一六日付『時事新報』の論説 (アメリカ) 《我日本の国土は亜細亜の東辺にありと雖ども、 に失ふ所は又土地に鮮満にて償うべし》というプログラム実 その国 《取り易き朝鮮 『脱亜論』で定式化 民の精 神 は 満 州

とって不平等であった以上に、

細亜の固陋を脱して西洋の文明に移りたり。

支那……

朝鮮

此

国

・其古風旧慣に恋々するの情は百千年の古

文明国と進退を共にし、 に異ならず、 其の支那朝鮮に接するの法も隣国なるが故にとて特別の会釈に及ばず、 我国は隣国の開明を待て共に亜細亜を興すの猶予あるべからず、 寧ろその伍をを脱して西洋の まさに西洋人がこれに

接する風に従って処分すべきのみ。》(全集⑩・翌)

だに日本が治癒していない近代日本の宿痾ではないか、 涼しい風が吹いてくる。 日本と朝鮮の不幸な近代史の出発点となった要塞跡には日本では聞いたことのない蝉の鳴き声が響き、 日本の近代の 「脱亜入欧」 路線はここから始まったのではないか、 と私は考えていた。 そして「脱亜入欧 水路の方から は

註 姜在彦『朝鮮近代史』 のように表記する。 それ以外の書物からの引用は、 (平凡社・一九九八・43) 岩波版『福沢諭吉全集』からの引用は、 著者名・書名 (出版社名・発行年・頁) 引用にすぐ続けて、 のように表記する (全集・

註2 杵淵信雄『福沢諭吉と朝鮮』(彩流社・一九九七・18)

註 3 雲揚号事件が日本政府の計画的挑発であることについては、 また姜在彦の前掲書・53― 55 梶村秀樹『朝鮮史』(講談社新書・一九七七・⑪) 山辺健太郎 『日韓併合小史』 にも同様の指摘がある (岩波新書・一九六六・ 22 26 参

(4)

註 4 姜在彦・前掲書

註 5 アと和親条約締結 アメリカを始めとする欧米諸国との間に幕末から明治にかけて日本が結んだ条約 Ιţ ①相手国に領事裁判権(治外法権)を認めたこと、 ②日本が関税自主権をもたないこと、 (一八五四年八月英国と、 同年 ③相手国に 十二月ロシ

の期限あるいは廃棄の条項が欠けていること 、の四点で不平等であった(池井優『近代日本外交のあゆみ』日本放送出版協会・ 方的に最恵国条項 (日本がある国に何らかの利益を与えた場合に、同じ利益を相手国に与えること)を認めたこと、

る条項と、 一〇〇六・34)。 ?不平等条約にも見られない二条項を含んでいた。さすがに無関税条項は一八八二年には廃止されるが、 関税自主権どころか朝鮮に輸出された日本商品に関税をかける権利自体を否定する無関税条項という、 江華島条約は、これら①③④に加えて、朝鮮開港地 (釜山・仁川・元山) において日本貨幣の流通を認めさせ 梶村秀樹が指摘して

いるように、これら二つの不平等条項は、 《日本商人の掠奪的貿易に道を開くことになった。》 (梶村秀樹

107

註

6

琴秉洞『日本人の朝鮮観その光と影』(明石書店・二〇〇六・44

## (二) 問題の所在——『脱亜論』と「脱亜入欧」

代」)、福沢諭吉の時事新報社説における「脱亜入欧」が受け入れられて、「文明開化」という名の欧化主義が支配しま 東アジア諸国は先進国になり得る展望をもちがたいという意味で日本にとっての「悪友」である、という認識を前提に の日本の知識人にとっての合い言葉になっていました。これは、東アジアの中で日本だけが「先進国」であって、 紀末から開始されていたのですが、 ている。この結合はまた、たとえばある社会学者の著作にも見出される、 調べると、《アジアから脱して、欧米諸国の仲間入りをすること。日清戦争前後のアジア観の一つとして言われた言葉。 してのことでした。 一八八五年 しばしば (明治一八)の福沢諭吉の 「脱亜入欧」の提唱者として福沢諭吉の名が呼び出される。たとえば、『大辞林』で「脱亜入欧」の項目を ……明治前半の二十年間には、 明治期の日本は非西洋世界の中の孤立者で、福沢諭吉のいった「脱亜入欧」が当時 「脱亜論」 が代表的。》とあり、「脱亜入欧」と福沢諭吉の『脱亜論』が結合され 大久保利通の殖産興業政策、 ――《日本の資本主義的発展はすでに一九世 井上馨の対西洋宥和政策 (「鹿 他の 館

( 5

現自身は彼の造語ではないことは事実として確認しておく必要がある「入欧」を附加して四字成句にしたのが誰であっ この結合について、 福沢諭吉が 『時事新報』 の社説として発表したのは『脱亜論』 であって、 「脱亜入欧」 という表

すの猶予あるべからず、寧ろその伍をを脱して西洋の文明国と進退を共にし、 故にとて特別の会釈に及ばず、 たかは今のところわからない。 言うべきである。したがって、福沢の『脱亜論』と「脱亜入欧」が結びついていることには本質的な問題はない 「西洋の文明国と進退を共にする」ことであるから、「入欧」は福沢の「脱亜」にそもそも含意されていた内容であると 『脱亜論』をめぐって、 真に問題とされるべきは、 しかし、すでに引用した『脱亜論』 まさに西洋人がこれに接する風に従って処分すべきのみ。》 丸山真男の福沢諭吉論に代表されるような戦後民主主義の先駆 の結論部 《我国は隣国の開明を待て共に 其の支那朝鮮に接するの法も隣国 を読めば、 アジア蔑視を広め 脱 亜 亜 の [なるが 目 的

アジア侵略を鼓吹したイデオローグ像の間で、 とによって、 福沢全集の編纂者である石河幹明の執筆であることを証明し、 分裂していることである。そしてこの分裂を回避するために、 として評価されるような市民的自由主義者像と、最近では安川寿之輔の福沢論によって代表される、 このようにもつれた問題状況を整理しておかなければならない。 福沢諭吉にかけられたアジア侵略のイデオローグという汚名を雪ごうとする平山洋の試みも現れている。 長年日本の最高額紙幣の肖像として君臨している福沢諭吉像そのものが 福沢のアジア蔑視的認識はすべて石河幹明に転嫁するこ ある時期以後の『時事新報』の論説は福沢の弟子にして

6

### (1) 丸山真男の福沢諭吉論

を以て一方新日本建設の素材となるべき欧州市民文化の移入普及と、 戦後に支配的となった福沢諭吉像は、 主として丸山真男の福沢論によって形成されたものである。 他方国民に深く根を下した封建意識の打破とに それは、

渾身の力を注いだ》<br /> 《幕末から明治初期にかけての最大の啓蒙思想家》》、 あるいは 《東洋社会の停滞性の秘密を数理的

認識と独立精神の 一者の欠落に採り当て、》 《独立自由の精神と数学物理学の形成とをヨーロッパ文明の核心と考え

を問題にするところに際だった特徴がある。 中心にした読解であって、 波新書・一九八六)三巻本の出版であった。 近代精神の構造に対する透徹した洞察をもっていた》思想家、 私が福沢諭吉を読み始めたきっかけは、やはり丸山の一連の福沢論であり、とりわけ『「文明論 福沢を近代精神を体現した思想家として扱い、 たとえば、 丸山の福沢論は、 《理のためにはアフリカの黒奴にも恐入り、 要するに近代主義者としての福沢諭吉像であった。 福沢のほとんど唯一の理論的著作『文明論の概略』 個々の思想内容ではなく、 の概略」 道のためには英吉 福沢の思考方法 を読む』

[際法を重視する国際関係認識と、《百巻の万国公法は数門の大砲に若かず……大砲弾薬は有る道理 (**イギリス**)、 亜米利加 (アメリカ) の軍艦をも恐れず》(『学問のすすめ・初編 (一八七二)』・全集③31) という、 を主張 する備に

7 (

的が状況に応じて推移すれば同じ事物に対する彼の価値判断も当然変化せざるをえない》ということによって説明され 的を指定させる。 する言明は、 あらずして無き道理を造るの器械なり》(「通俗国権論」一八七八・全集④ੳ)という露骨な覇道的国際関係認識 《価値を具体的状況との相関において決定する考え方》、すなわち《一定の具体的状況が彼に一 そうしてこの目的との関連においてはじめて事物に対する彼の価値判断が定まってくる。 従 っ 定の の矛盾 B 目

福沢を読んでいるのに過ぎなかったことを思い知らされることになる。 でいる限りにおいて、 「山のこうした分析は、 説得力をもっているように私には思われた。 福沢のよく知られた著作である『学問のすすめ』・『文明論の概略』・『福翁自伝』などを読ん しかしその後私は丸山の偏っ 丸山の形成した福沢諭吉像を「丸山諭吉」と呼 たフィルター を通して

んだ安川寿之輔の福沢論の登場である

る

#### 2 安川 . 寿之輔の福沢諭吉論

であった。ようやく見え始めたその素顔と差別・侵略思想の系譜を確認・論証しよう。》(52—53) この記事は 思想家』という評価が定着している福沢諭吉は、 私がはじめて安川寿之輔の研究に接したのは、『週刊金曜日』(33号・二〇〇〇年九月八日)に載った -アジアから見たもう一人の福翁」 実は徹底したアジア蔑視論者であり、 と題する記事であった。《最高額面紙幣にも使われ、 近代日本のアジア侵略の先導者 明 「福沢諭吉を透 治 『脱亜論 の

だけでなく、福沢の論説から幅広く引用することによって、 の先導者であったことを論証しようとしていた。丸山真男の描き出した福沢像に囚われていた私は当初半信半疑であっ 福沢諭吉がアジア蔑視論者であり、 近代日本のアジア侵略

箇所をすべて選び出して分類した資料が巻末に付けられており、『福沢全集』のとりわけ『時事新報』 沢像には重大な欠陥があることを認めざるをえなくなった。この偶像破壊の書には、『福沢全集』からアジアに関する 漫言」と呼ばれる記事)に含まれるアジア蔑視とアジア侵略に関わる部分が列挙されていたのである 間もなく出版された『福沢諭吉のアジア認識』(高文研・二〇〇〇年十二月出版) を読むにいたって、 論説 丸山 (および の福

8

人の常……兵力の恐るべきものを見るに非ざれば因循姑息際限なきが故に、……兵力……其威を示すのみ……朝

日清戦争直前の朝鮮について、《改革に兵力は無用なるに似たれども、

文明流の改革を悦ばざるは未開

争の最中に有利な戦局について、《目に付くものは分捕品の外なし。何卒今度は北京中の金銀財宝を掻き浚へて、 上流は腐 儒 の巣窟 下流は奴隷の群集》(一八九四年七月四日・「兵力を用いるの必要」・全集49・45)、 また日清

余さず漏らさず嵩張らぬものなればチャンチャンの着替までも引っ剥で持帰るこそ願わしけれ

(一八九四年九月二十日「漫言」・全集⑭・⑪)、さらに日清戦争後日本の領土になった台湾での島民の抵抗について、

ではいられないだろう。 る福沢が日本の最高額面紙幣の肖像として現在も君臨し続けていることに、戦後に生きる日本人として疑問を感じない れてきた福沢にこのような発言があることに多くの人は驚くに違いない。そして、このような恥ずべき文章の著者であ 以て大英断を行ふ可し》(一八九六年一月八日・「台湾の騒動」・全集⑮・紭)。 枯らし根を絶ちて一切の醜類を殲滅し、 (いやしく) も我に反抗する島民等は一人残らず殲滅して醜類を尽し、 しかしこれらの記事は本当に福沢が書いたのか? 土地の如きは盡(ことごと)く之を没収して、全島挙て官有地と為すの覚悟を ……兵力を以て容赦なく掃蕩を行ひ、 戦後民主主義の先駆者としてもてはやさ

文の内容は本書第四章第3節に反映している。》本書というのは平山洋の『福沢諭吉の真実』である。 ジア蔑視を批判したその内容は、彼の『福沢諭吉のアジア認識』を要約したものだった。私は直ちに反論を執筆し、 視広めた思想家」 右に引用したような『時事新報』の論説や「漫言」は、 いにもそれは た私の福沢研究を転回させたのは、二〇〇一年四月、 安川福沢論の出現はとりわけ慶応関係者に衝撃を与えたようである。《多くの研究者と同じく石河幹明に依拠してい 「福沢諭吉─アジアを蔑視していたか」(同欄、○一・五・一二)として公表することができた。この短 (「私の視点ウィークエンド」欄・○一・四・二一)であった。『時事新報』論説に基づいて福沢のア 朝日新聞に掲載された安川寿之輔氏の論説 石河幹明が自分自身で執筆したものを、 偽って『福沢全集』の 「福沢諭吉―アジア蔑 平山によれば、

9

#### (3) 平山洋の福沢諭吉論

時事論集

に採録したものだという。問題は意外な展開を見せたのである。

亚. Щ の 『福沢諭吉の真実』 は 《福沢を市民的自由主義者とする見方と、 侵略的絶対主義者とする見方のうち、

る侵略的絶対主義者の諭吉像を描き出すとともに、同時並行で編纂されていた昭和版 た》と主張する。 は 九三四)』 石河幹明による『福沢諭吉伝』 の 「時事論集」に、そのような諭吉像を裏付ける自分が執筆した論説を大量に採録したのだという 石河幹明の 『福沢諭吉伝』(全四巻・岩波書店・一九三二)は、 と昭和版 「時事論集」 が完結した一九三四年以降にあらたに付け加えられた評 国権拡大のために軍備の増強を呼号す 『続福沢全集 (全七巻・一九三三― 価であっ

者の持ち込み原稿に福沢が添削を施した「記者立案、 執筆した 『時事新報』の論説 「福沢真筆」、 (「漫言」も) は無署名であるから、 Ⅱ福沢が立案して社説記者が下書きをし、 福沢添削」、Ⅳ全面的に記者が執筆して福沢は全く関与してい 論説には以下の四種類があることになる。 さらに福沢の検閲を経た 「福沢立案記者起稿 I福沢がすべてを Ш

い「記者執筆」。

私には現在の岩波版『福沢全集』(一九五八―一九六四)に含まれる

「時事論集」

にカテゴリー

Ⅳがどれぐらい含ま

10)

石河幹明が執筆した論説はカテゴリーⅣに相当する。

する論説が連日紙面に載ることを傍観したと考えられるであろうか。 れているのかについて判断できない。しかし、直接『時事新報』に携わることはなくなっても、 石河幹明が自ら発案し自ら起草した問題 福沢は自らの思想に反 の論説

ではないか。 れなかったのか、 つまりアジア蔑視と侵略鼓吹を内容とする論説は、 平山洋も《とはいえなおも疑問は残る。 ということである。このことについて明快な答えを提示することは難しい。》と述べている。 福沢自身が容認していたものであるという可能性は排除できない それは、 石河の民族的偏見説の紙上への掲載を福沢はなぜ止めら

性がある以上、 ともあれ、 福沢のアジア蔑視やアジア侵略思想を論じる場合に、そうした思想が含まれる論説はカテゴリー うかつに『時事新報』 の論説や 「漫言」を引用することは不可能になったことは事実である。 ĪV の可能

『脱亜論』はどうであろうか?

述べている。。そうすると、アジア蔑視やアジア侵略は福沢の思想ではなく、 Щ ば 井田進也の研究を踏まえ、 また 《論の運びの巧みさと語彙の平明さからいって真筆であると考えている》 石川幹明の思想であるという弁明は、

などが指摘されている。最後に、これが一番重要なのだが、 の結成(一八八〇年)を機縁に流通をはじめた **きわめて最近の現象であり、たかだか**一九五○年代以後の傾向であること》、第三に、《「脱亜」というのは、「興亜会」 はこの論説で唯 の中国や朝鮮に対する蔑視について弁護しておく必要を感じたものであろう。論点は多岐にわたるが、第一に、「脱亜 されたもので、『脱亜論』へのかなり詳しい言及がある。 が収められている。これは『福沢諭吉と日本の近代化』という題で丸山の福沢論が中国語で翻訳出版される機会に執筆 の **亜論』に関しては成り立たないことになる。福沢の汚名を雪ごうとする人にとっては、** いて書いた『時事新報』の短い社説は、 ……福沢の全思想のキーワードとして、学界だけでなく、一般ジャーナリズムの世界にまで流通するようになったのは 論説は躓きの石なのだ。 (山真男の主要な福沢論を集成した『福沢諭吉の哲学』(岩波文庫)には「『福沢諭吉と日本の近代化』序」(一九九一) 4 度用いられているのみで、福沢のキーワードではなかったこと、第二に、 問題設定 その直前の一八八四年十二月に、 「興亜」という言葉にたいするシニカルな反語的表現と思われること》 《福沢が、一八八五年の時点でただ一回、 中国人が読者として想定される以上、丸山真男としても福沢 李氏朝鮮で勃発した「甲申政変」とそのクー あまりにも有名になりすぎたこ 《「脱亜入欧」という成句が 「脱亜」の文字を用

11)

デターの短命な崩壊の衝撃の下に執筆された。

……福沢は、これら金玉均ら朝鮮開化派の動向に、

思想的にだけでなく

ア観の表明というよりは、 うした福沢の挫折感と憤激の爆発として読まれねばならない。 敗を日和 沢の失望は甚大であり、 ある程度実践的にも早くからコミットしていた。それだけに、 欧米の列強の仲間入りをして朝鮮・中国を侵略し植民地化してもよいという『脱亜論』 見主義的に傍観し、 またこの事件の背後にあった日本及び清国政府と李氏政権とが、それぞれの立場から、 一時的な感情の表現と解釈すべきである、 もしくは徹底的に利用した態度は福沢を焦立たせるに充分であった。 (傍点引用者)》という指摘である。 甲申の政変が文字通りの三日天下に終わったときの、 という、結局は福沢擁護論である この指摘の意味すると の宣言は、 「脱亜論」 の社 福沢のアジ 政変の失 説はこ

Ш の議論もこれと同工異曲である。 平山も、 福沢がかなり加担していたと言われる甲申政変の失敗という文脈で

に引摺られて、 三歳五歳の小児等は父母の手を離るるさへ泣き叫ぶのの常なるに、 老翁老婆を刑場に引出し、 る 一脱 そこには連座制によって処刑される政変の首謀者たちの家族の描写がある。 論 を読むことを求め、 細き首に縄を掛けらる其時の情は如何なる可きや。 東西の分かちも無き小児の首に縄を掛けて之を絞め殺すとは、はたして如何なる心ぞや。 『脱亜論』 の発表される三週間前に発表された 唯恐ろしき鬼に捕まれたる心地するのみにして、 荒々しき獄卒の手に掛かり、 「朝鮮独立党処刑 《心身柔弱なる婦人女子と白髪半死の 雪霜吹き晒しの城門外 (後編)」 を引用してい 其

12)

潤ほすを覚へざるなり。 に居り、 击 索の窄 を限りに泣入りて、 (し) まりて呼吸の絶ゆるまでは殺さるるものとも思わず、 固より其国事に縁無き者なれども、 絞索漸く窄まり、 (全集 10 225 \*\* 泣く声漸く微にして、 此事情を聞いて唯悲哀に堪へず、今この文を草するにも涙落ちて原稿紙 終に絶命したることならん。 唯父母を慕ひ、兄弟を求め、 ・吾輩は千里遠隔 父よ母よと呼び叫 の隣

しかし、この 『脱亜論』 は 甲申政変の挫折感と、 連座制によって家族まで処刑する残酷な李氏朝鮮 への憤激 の表現

### にすぎないもので、 福沢のアジア蔑視とアジア侵略思想を読み込むべきではないのであろうか。 『脱亜論』 をめぐる米

路にも似た問題状況をここまで辿って来て、一つの問いがようやく形をなしてきたようである.

註 ① 富永健 『近代化の理論』 (講談社学術文庫・一九 九六・40および58

註 ② 福沢の造語であり、 丸山真男『福沢諭吉の哲学』(岩波文庫・二〇〇一)に所収の 愛用語であるかのような俗説》に対して、 「脱亜」 「『福沢諭吉と日本の近代化』 は 『脱亜論』で一度だけ使われたこと、「脱亜入欧」 序 اثر 《「脱亜入欧」 があたかも

\_ は

福沢には用例がないことを指摘している。(22)

註 ④ 註 ③ 丸山 丸山 前掲書所収 前掲書所収 「福沢に於ける「実学」の転回」(一九四七・45および54 「福沢諭吉の儒教批判」(一九四二・7)

註(5) 丸山 前掲書所収 「福沢諭吉の哲学」(一九四七・72および73

註⑥ 以上の福沢からの引用は、 安川寿之輔『福沢諭吉のアジア認識』 の巻末資料 「福沢諭吉のアジア認識

の軌跡

からの孫引き

(13)

註⑦ 平山洋 『福沢諭吉の真実』(文春新書・二〇〇四

である

註 ⑧ Щ 前掲書 231

価する方法を駆使して行 われた調査を指す (平山・前掲書・82)。

註 ①

註 12

山

前掲書・282

283

註 (II) 註(10) 註 ⑨

ш Щ Щ

前掲書

205 179 80

井田進也の研究とは、

福沢ならではの語彙・

表現・文体の特徴を取り出して、

福沢の関与の度合いを評

平 平

前掲書

前掲書

平山は、 丸山 の第 一の論点、 第二の論点、 第四の論点をほぼ踏襲している

## (三) 問題解決―アジア蔑視とアジア侵略

は きだというのであった。 今私たちは一つの問いを前にしている。 であっても、 石河幹明が書き、 歴史的文脈を見れば、福沢のアジア観が述べられているというよりは一時的な感情の爆発と解釈すべ 福沢の関与していない論説(カテゴリーIV)であり、『脱亜論』のように福沢の真筆 では、 福沢にはいささかもアジア蔑視そしてアジア侵略的思想は存在していなかったのである 平山説によれば、 アジア蔑視やアジア侵略を鼓吹する『時事新報』 (カテゴリー の論説

#### (1) アジア蔑視の検証

だが、これらはすべて真筆または福沢立案の文章である(カテゴリーI、 (一八九八年七月一日から一八九九年二月一六日まで連載・刊行は一八九九年六月) 要と見なした文章は自らの名の下に著作として発表するのが常であった。 が一八八二年三月一日に創刊されて以来、 なかった残りが現行 た『時事大勢論』(一八八二年四月五日から十四日まで連載・同年四月刊行)から七巻前半に収められた『福翁自伝』 この問いには、 平山が主張するように、この「論集」に収録された文章には疑義があり、 福沢の真筆または立案であることが明らかな文章を検討して答えることができるはずだ。『時事新報』 『福沢全集』 の第八巻から第十六巻に収録されている 福沢は執筆したすべての文章をいったんはこの新聞に掲載して、 およびⅡ)。このように著作に取り入れられ 「時事新報論集」 現行岩波版全集の第五巻の後半に収められ 《現行版『福沢諭吉全集』 はすべて初出は であり、 『時 これらは無署名で 事 の 新 報 その後重 「時事新 なの

をこのまま放置しておくことは許されぬことである。》したがって現時点では、 「論集」 の論説を除外して議論

報論集」 これは藩に対する藩士たちの態度について述べた箇所で、「本藩に対しては其卑劣朝鮮人の如し」という小見出しがあ をするほかはない 両でも十両でも旨く取出せば、 それではまず、 《私が中津藩に対する筆法は、金の辞退どころか唯取ること斗り考へて、何でも構わぬ、取れる丈取れと云う気で、 アジア蔑視についてはどうであろうか。 なんだか猟に行て獲物のあったやうな心持がする。 最晩年の『福翁自伝』には、 拝借と云て金を借りた以上は此方 以下のような一節が見出される。

すでに引用した 思はず、 のもので、返すと云ふ念は萬々ない。仮初にも自分の手に握れば、借りた金も貰た金も同じことで、 れていても、 義理も廉恥もない其有様は、 福沢の思想においては、 『『福沢諭吉と日本の近代化』序」において、《たとい便宜上、シナとか朝鮮とかいう同じ表現が用いら 終始、 今の朝鮮人が金を貪ると何も変ったことはない。(全集⑦・210―211)》 政府 (政権)と国とをハッキリ区別する立場がとられ、 また、 後のことは少しも 丸山真男は、 政府の存亡

15)

上流は腐儒の巣窟、 れども、『福翁自伝』 下流は奴隷の群集》(一八九四年七月四日・「兵力を用いるの必要」・全集⑭・紭)これはすでに引 の一節が示しているのは、「朝鮮人」に対する民族的偏見以外のなにものでもない。 《朝鮮人……

と人民あるいは国民の存亡とをきびしく別個の問題として取り扱う考え方が貫かれていた》と、福沢を弁護しているけ

用した石河幹明が執筆した疑いのある『時事新報』 すでに示唆したように、「石河の民族的偏見説の紙上への掲載を福沢はなぜ止められなかったのか」という疑問 論説の一節であるが、 両者の偏見の間に本質的区別を見出すのは

へのもっとも 「明快な答え」は、 福沢と石河幹明は民族的偏見を共有していたからだ、ということである

#### 4) アジア侵略思想の検証

西欧化 実上前者への道を選んで江華島事件を計画的に引き起こしたのであった。 抵抗するか、 配 直 前 へ踏み出すか、それとも西欧化=近代化を行いつつアジア諸国 H に出 本の独立を維持するために西洋文明を採用することを福沢は断固として主張した。江華島 (=近代化) 版された『文明論の概略』(一八七五年八月) という岐路である。 をした場合、 次のような岐路に直面することになる。すなわち、 『文明論の概略』 の福沢はまだこの岐路を主題化してはいなかったが、 の趣旨はそれに尽きる。 (朝鮮と中国) と連帯して列強の侵略や植 したがって福沢の一八八五年の しかし、 西洋列強のように侵略と植民地支 西洋文明を取り入れ (雲揚号) 事件が起こる 『脱亜 明治政 民地支配に は は

脱亜論について、 (山真男に近い立場にいた藤田省三は次のように述べている。 《このごろよく誤解されているのですが、 彼は日本がアジアの一員から抜け出して西洋圏の一員になろうと説いたということになってい 福沢諭吉の

お師匠様」をもって任じたというが、アジア侵略に関しては彼が先導したとは言えない。

明治政府がすでに実践しつつあった前者の道を

「脱亜

(入欧)」と適切に命名したにすぎないのだ。

福沢は明治

政

府の

それはあたってなくもないんですが、その場合、

福沢の動機の中には、

日本がアジアの一員という自覚があって、

マル

天心は「アジアは一つなり」といったけれど、実はアジアはひとつでないという事実、 クスなどが「アジア的生産様式」というそのアジア性を克服しなければ、という自己批判の一面があったのです。 その現状を知っていた。 つまり 畄

目標を宣言として「一つなり」といった、それと似通った精神的動機が福沢の中にもあったのです。

西洋列強に対して独立性を確保し、 ところが不幸にしてそのあとの歴史的事実が、 仲間入りしようという方向に進んでいったものですから、その線から過去に向かっ 日清、 日露戦争から、 アジア諸国を侵略することによって日本 だけが

(

ことは私も否定しないが、 て延長線を引くと、 福沢の脱亜論にぴったり合ってしまったわけです。》福沢の『脱亜論』 明治政府は少なくとも江華島事件の頃から「脱亜 (入欧)」の道に踏み込んでおり、 に自己批 判の 面 が 福沢の あった

"脱亜論』 はその追認として見るべきだと思う。

であるにしても、 私たちの問題はこうであった。丸山真男や平山洋のような福沢擁護論者は、『脱亜論』 福沢が肩入れしていた金玉均などの開化派官僚たちのクーデターが三日天下に終わり、 は真筆(カテゴリーI) 彼らの家族ま

で処刑されるという知らせを聞いて、 への憤激の表明に過ぎない、として、『脱亜論』 露骨にアジア蔑視やアジア侵略を鼓吹する『時事新報』論説群(たとえば「兵力を用いる必要」や「台湾 朝鮮を明治維新のように文明開化に導くという希望を失った挫折感と残酷 に情状酌量の余地を認めていた。これまで福沢に汚名を着せる根拠に な処刑

て というよりは一時的な感情の表出にすぎない以上、アジア蔑視とアジア侵略の鼓吹者という福沢の汚名は濡れ衣である、 福沢擁護論は正しいかどうか、これが残された問題である このように福沢擁護論を要約することができる。 アジア蔑視については前項ですでに検討した。アジア侵略論つい

の騒動」のような)

は石河幹明の論説を福沢の論説に偽装したものであり、

真筆の『脱亜論』も、

福沢の一貫した思想

17)

この問題もまた、 福沢の真筆であることが疑い得ない論説に依拠して解決することができる。

実は安川寿之輔

あ

先立つこと四年の一八八一年十月に出版された『時事小言』を福沢の まりにも有名な 《『脱亜論』(一八八五年)から福沢のアジア認識が変化するという一般的な誤解》 有名ではあるがたかだか二千字程度の『時事新報』 「保守思想確立の書」と呼び、 を批判して、それに そこにアジア侵略 論説の 一脱

に比べて、『時事小言』は題名にもかかわらず、岩波版全集の約一三〇頁を占める長編であり、 思想がすでに表明されていることを強調している。 もちろん福沢の名の下

に出版された紛れもない真筆である。重要なので少し長めに引用しよう。

等の方便を用ゆるも 相依頼せんことを望むは、 隣なる支那朝鮮等の遅鈍にしてその勢に當ること能はざるは、 其 き石室を造らしむること緊要なり。 我家を防ぐに兼て又近隣の為にその予防を設け、万一の時に応援するは勿論、 も 沙汰なりと云ふ者もあらんと雖も、 我責任なりと覚悟す可きものなり。 明の中心と為り他の魁 を以て之に応援するは、 ればなり。 (地面を押領して、 速かに我例に倣て近時の文明に入らしめざる可らず。 近隣合壁に木造板家の粗なるものあるときは、 今西洋の諸国が威勢を以て東洋に迫る其有様は火の蔓延するものに異ならず。 の主義は専ら武備を盛にして国権を皇張するの一点に在り。(……) 然ば則ち方今東洋の列国にして、 輔車相依り唇歯相助るとは、 我手を以て新築するも可なり。 唯これを誘導して我と共に運動を与にする程の国力を附与し、<br /> (さきがけ) 単に他の為に非ずして自からの為にするものと知る可し。 迂闊の甚だしきものと云ふ可し。 或は時宜に由り強て之を造らしむるも可なり。 抑も独立は一国の独立なり、 を為して西洋諸国に當るものは、 実際に於て決して然らず。彼の火事を防ぐ者を見よ。仮令ひ我一家を石室にする 同等の国と国との間には通用す可しと雖ども、今の支那朝鮮に向て互い 蓋し真実隣家を愛するに非ず、 決して安心す可らず。 或は止むを得ざるの場合に於ては、力を以て其進歩を脅迫 何ぞ之を輔と為し又唇と為すに足らんや。 木造板家の火に堪へざるものに等し。 我日本一国の独立を謀て足る可し、 日本国民に非ずして誰ぞや。 故に火災の防御を堅固にせんと欲すれば 無事の日にその主人に談じて我家に等し 武以て之を保護し、 又悪むに非ず、 又事情切迫に及ぶときは、 以て其輔たり唇たるの実効を奏し 然るに東洋諸国ことに我近 亜細 唯自家の類焼を恐る 故に我日本 他の保護は 文以て之を誘導 亜 今日 東方の保護 の要は何 無用の

18)

むるに在るのみ。

若しも然らずして、今の成行に任せ、

今の有様にて放却し、

我より之を助けず、

彼又自ら奮はず、

共に其魁を為さんとするの目的なれば、 を厳かにして国権を皇張せんとする其 不幸にして を隣家に招きたるものにして。 冒頭で、 堂々と、 日 此 国 土が西洋人の手に落ることもあれば、 《本編立論の主義は専ら武備を盛にして国権を皇張するの一点に在り。》と宣言される。 極度の不祥を云へば日本国の独立も疑なきに非ず。 、武備は、 其目的に従て規模も又遠大ならざる可らざるなり。》 (全集⑤・186 独り日本一国を守るのみならず、 其時の形勢は如何なる可きや。 兼て又東洋諸国 故に本編立 我ためには恰も火災の火元 論 を保護して、 の主義に 187 強兵によ 我 治 武 乱

アの保護にあたるべきだとする る国権皇張とはアジア侵略以外を意味しない。 「亜細亜の盟主」論が言及される。そしてその次に来るのが、 続いて、 東アジアで唯一文明化=西洋化に成功しつつある日本が東アジ 「類焼防御」 論である。

があるから、 起きたとき(西洋諸国の侵略によって西洋人の手に落ちた時)に類焼の恐れ(日本も侵略され独立が脅かされる恐れ) 我家 て之を誘導》 (日本) すること、 第一の手段としては、 が石室 無遠慮に其地面を押領して、 (文明化し軍備を充実した体制) でも隣家 (支那朝鮮) 第二の手段は、 《無事の日にその主人に談じて我家に等しき石室を造らしむること》、 武力的手段であり、 我手を以て新築するも可なり。》、すなわち、 《時宜に由り強て之を造らしむるも可なり。》、 が木造板家 (前文明的 《武以て之を保護し》、 体制 つまり では、 《又事 火事が

19)

福沢は明白に硬軟両様の手段を考えていたことがわかる。 武力的手段によって、 《又事情切迫に及ぶときは、 無遠

力を以て其進歩を脅迫するも可なり。》というのである。

を得ざるの場合に於ては、

に其地 されれば るための文明化 面を押領して、 《日本国の独立も疑なきに非ず》という論理であった。 !=西洋化が、 我手を以て新築する》ということは、 侵略に転ずる、 まさにその転回点は、 侵略と植民地化以外ではありえない。 侵略や植民地化はそのまま露骨に主張されるのではな 隣国の朝鮮 を始めとする東洋諸 国 日本の独立を が他 の列強 持

## く、必ずこうした正当化の論理の仮面をかぶるのである。

足らんや。》)、 今の支那朝鮮に向て互い えてよいが) かならない。 朝鮮や中国との対等の連帯を否定し は したがって『脱亜論』(一八八五)で定式化される「脱亜 朝鮮や中国への侵略や植民地化を肯定する論理は、 すでに『時事小言』(一八八一)において、 に相依頼せんことを望むは、 (《輔車相依り唇歯相助るとは、 迂闊の甚だしきものと云ふ可し。 確立されていたのであって、 『脱亜論』で展開される「脱亜 同等の国と国との間には通用す可しと雖ども (入欧)」の論理 何ぞ之を輔と為し又唇と為すに (立場あるいは姿勢とも言 甲申政変と関連させて、 (入欧)」の論理にほ

れば、 任せ、 ずかに残っていた、 運動を与にする程の国力を附与し、 亜論』を情状酌量することはできないことは明らかである。しかし甲申政変の影響があるとすれば、『時事小言』 すなわち日本が援助して、 其時 今の有様にて放却し、我より之を助けず、彼又自ら奮はず、不幸にして一旦此国土が西洋人の手に落ることもあ の形勢は如何なる可きや。 朝鮮自らが文明化する可能性 朝鮮自らが奮起する可能性、 以て其輔たり唇たるの実効を奏しむるに在るのみ。 (傍点引用者)》において、 ――《今日の要は何等の方便を用ゆるも、 つまり甲申政変の成功の可能性が、 否定形において表現された事が肯定形で実現する可 若しも然らずして、 唯これを誘導して我と共に 最終的に潰えたことに 今の成行に にわ

20)

実の福沢諭吉はそれらから免れていた、という福沢擁護論は成り立たないと言わざるをえない。 み取れるアジア認識は 以上の検証の結果、 アジア蔑視もアジア侵略思想も石河幹明が偽装した『時事新報』 石河幹明が書い たらしい論説に含まれたアジア認識と、 断絶しているのではなくて、 論説にだけ見られるもので、 福沢の真筆の著書に読 真

あるいは前者の延長線上に後者が位置していると考えるべきである

よって、第二の手段に訴える他はないということを表明した点に、求められるべきであろう。

としているが、《金 最近では、 佐高信の『福沢諭吉伝説』も、 (玉均)を支持し、 助けたという事実をもって福沢の「脱亜論」の悪評を葬りたい〟というのは 平山洋の福沢擁護論を踏まえて、 福沢をアジア 蔑視論者の 汚名から 救おう

いたずらに福沢の偶像を延命させるだけである。

主1 平山洋・前掲書・239

註2

7山真男・前掲書

註3 藤田省三著作集⑥所収「現代日本の精神」・みすず書房・一九九七・99―100

註4 安川寿之輔・前掲書・101

註5 佐高信・『福沢諭吉伝説』・角川学芸出版・二〇〇八・30

#### (四) おわりに

のなかにすでにあったものを拡大強化したにすぎない、という仮説を提案した。 文章から、アジア蔑視とアジア侵略、 は福沢のアジア認識をめぐる錯綜した問題状況を整理して、論争に一石を投じる試みである。明らかに諭吉の筆になる 諭吉にかけられたアジアの蔑視者・アジア侵略のイデオローグという汚名を雪ごうとする平山洋の研究が現れた。 沢像を提出した<br />
安川寿之輔に対して、そのようなアジア認識をすべて弟子の石河幹明に転嫁することによって、 「山真男によって作られた市民的自由主義者としての福沢像を破壊して、アジア蔑視とアジア侵略思想を鼓吹した福 すなわち「脱亜 (入欧)」的姿勢を取り出して、 最高額面紙幣の肖像として福沢がふさ 弟子は改竄したのではなく、 本稿 福沢

# わしいかどうか、私たち日本人は真剣に考えるときが来ている。

を中断したのか?」(『日本語文学』第三十四集 ・二〇〇六・韓国)に続く、第二作目である。二〇〇八年十一月五日脱稿。) (本稿は、朝鮮と関わりのあった日本の知識人を通して日本近代を問い直すシリーズの第一作「夏目漱石はなぜ<br />
『満韓ところどころ』